

## モーツァルトとバッハと吉田秀和と映画の背景音楽(BGM)

1789年5月晩年のモーツァルト(33歳:バッハ没後39年)はウィーンからベルリンへの旅の途上ライプツィヒに立ち寄り、バッハのゆかりの地である聖トーマス教会でオルガン演奏をしてバッハの弟子で当時の合唱隊長ドーレスを感激させたが、そのお返しに合唱隊の練習曲であったモテット第1番 BWV 225 < Singet dem Herrn ein neues Lied 主に向かって新しい歌をうたえ > を聴いたという。そのときの模様を9年後ライプツィヒの「一般音楽新聞」に主筆のロホリッツ(J.F.Rochlitz 1769-1842)が次のように書いている。

モーツァルトはこのドイツ音楽のアルブレヒト・デューラー(注:ドイツ・ルネサンス絵画の巨匠、ここではバッハを指す)を当時ごく稀にしか演奏されなくなった作品そのものよりは風聞で知っていた。合唱隊が数小節歌うやいなやモーツァルトは息を呑んだ。さらに数小節進むと彼は「これは何だ」と叫んだ。今や彼の全霊は耳となったようであった。歌が終わると彼は嬉々として叫んだ「これはまさに学ぶべきものだ」。この学校はかつてバッハがカントール(合唱隊長)だったので、彼のモテットの完全なコレクションがあり、一種の聖遺物として保存している、と説明された。「それは素晴らしい。見せてください」と彼は叫んだ。しかし総譜がなかったので、筆記されたパート譜が手渡され、モーツァルトは腰を据えて、パート譜を自分の周囲に、両手、膝の上、手近な椅子の上に散らばせ、他のことは全て忘れ、セバステアーン・バッハによって書かれたものすべてに目を通し終わるまで立ち上がらなかった。(抄訳 山田)

この逸話はバッハのモテット集の解説書には必ずといってもいいほど紹介されており、あの有名な哲学者兼医者兼音楽家シュヴァイツァー(A.Schweitzer 1875-1965)の大著「バッハ(全三巻)」(白水社)や現在のバッハ学者クリストフ・ヴォルフの著書などにも注記されている。これに対し多くのモーツァルト学者はこの逸話の信憑性を否定しており、アインシュタイン(楽事通信第6号参照)に至っては「このライプツィヒの文学かぶれのお喋り屋がモーツァルトの死後に流布させたさまざまな逸話(でたらめ)」の一つと言っているほどである。ちなみに10年前に出版された若手学者による大作曲家徹底攻略問題集の「バッハ問」には先のロホリッツの逸話そのまま掲載されているのに対し、「モーツァルト問」には「モーツァルトの演奏がドーレスに強烈の印象を与え、彼は感激してまるで老バッハが再来したかと思えた」と記載されているだけで先の逸話は全く無視されており、バッハ学者とモーツァルト学者のせめぎあいを見るようで面白い。

その真偽はともかくこの逸話はいかにも映画の一シーンに出てきそうなので、ひょっとしてと思い往年の名画「アマデウス」(1984年米国)を見直してみた。ライバルであるサリエリ(なんと今人気のピアニスト・ゴーストライター新垣隆とそっくり)の回想の形でモーツァルトを描くこの映画は従来の神童・天才像を一新させた傑作とってよく、冒頭の第25番のト短調シンフォニーやレクイエムなどモーツァルトの作品が要所々々で使われている。くだんの逸話のシーンはなかったが、夫に内緒のコンスタンツェの売り込みによりサリエリがモーツァルトの楽譜を手にしてあまりの素晴らしさに思わず落としてしまう場面ではハ短調ミサ曲のクリステ・エレイソンが使われているし、ほかにもザルツブルクの教会で新婚2人にかぶせるように冒頭のキリエが歌われている。英国人シェファア原作の日本の舞台では松本幸四郎と江守徹が熱演したが、そのときはグランパルティータ(13管楽器のためのセレナード)が極めて効果的にBGMとして使われていたのが印象に残っている。

3年前に亡くなった文化勲章受章者の音楽評論家吉田秀和は多くのクラシックファンにとっては教祖みたいな存在だった人で、私もその信徒の一人で学生時代からの愛読者であり、サントリーホールで行われたお別れの会にも出席したほどだった。このとき病気療養中の小澤征爾が突然舞台上に登場しG線上のアリアを見事に指揮したのを思い出す。彼の著書は最近でも装いを変えて何冊も出版されているが、モーツァルトのハ短調ミサ曲について書いているものを探しているうちに次のような文章にぶつかった。

このミサ曲もね、すごくいいミサ曲だけど、モーツァルトがオペラやなんかで書いていた書きかた・・・しゃべりかたが随所に出てくる。教会でのごそかに執り行われる儀式の一環として演奏される音楽でありながら。そこがモーツァルトのとってもおもしろいところですよ。だからフランスのルイ・マルといったかしら、あたらしい流れの監督がいたでしょう、才気煥発の。あの人が「死刑台のエレベーター」という映画を作った。・・・あのなかでこのミサ曲の最初の部分「キリエ」を使っていますけど、ある意味ではぴったりであり、本当にびっくりしちゃいますよ。「キリエ」というのは神様にむかって「神さま、どうぞ救ってください。イエス・キリスト、どうぞ救ってください」、つまり「あわれみたまえ」ということをいう、訴えの部分ですよ。映画のなかで悪人が上手くやったと思ったら、結局はやり損なって捕まっちゃうところなんですけど、・・・そういう悪のさなかでの訴え、そこに使われて、しかも音楽はちっとも悪とかじゃなくて、きれいなもんだ。ただし迫力はあるですね。(「名曲のたのしみ、吉田秀和」第5巻 2013年 学研 1991年NHK・FM放送分から)

これはNHK・FMで40年にわたり独特の語り口で放送され多くのファンを獲得した「名曲の楽しみ」のテープを起こして本にしたものの一部である。「死刑台のエレベーター」(1957)は社長夫人が愛人に自殺と見せかけて夫を殺させたはいいが、その犯人が逃げる途中にエレベーターに閉じ込められ、その間に別のアベックが犯人の車とピストルを使って別の殺人事件を起こすという今見ても実に面白い映画だ。筆者はそれこそ50年以上も前に見て主演のジャンヌ・モロー(苦みばしった-これは男に対しての言葉だそうだが-いい女)にほれ込んだものだ。そのBGMにハ短調のキリエが使われていたとは記憶になかったので、早速ブルーレイを取り寄せて慎重に確かめたが、マイルス・デイヴィスの哀調あふれるトランペットが全編に響きわたるだけでキリエは全く出てこない。一か所だけアパートの一室からハイドンのセレナードが流れてくるシーンはあったがモーツァルトは皆無。それで色々調べたら同じヌーベルバーク(新しい波)のロベール・ブレッソン監督の「抵抗・死刑囚の手記より」と取り違えたらしいことが分かった。この映画はナチ占領下のフランス死刑囚の脱獄を克明に描いたものだが、ここには確かに冒頭からキリエが流れ、シーンが変わるごとに効果的に使われていた。吉田秀和はおそらく同じヌーベルバークの作品で「死刑」という共通語に惑わされて記憶違いしたのだろう。しかし悪妻(?)コンスタンツェに捧げられたハ短調ミサ曲は女性が全く登場しない脱獄劇よりは悪女が主演の「死刑台のエレベーター」にこそ吉田の言うオペラ的効果を発揮してふさわしかったのではないか。

モローは「恋人たち」というマル監督の後年の映画でも主演だったが、これにはブラームスの弦楽六重奏曲の一部がBGMとして使われすっかり有名になった。映画の内容自体は今から見ると「死刑台のエレベーター」より相手役の男優がイケメンでないこともあってぐっと劣る。しかし一夜の出来事のあと朝早く夫の面前から恋の逃避行をする2人の車に鶏がコケコッコと3回鳴く最後の場面。50年前には気付かなかったが、バッハを長年歌っているとすぐに分かった。マタイやヨハネ受難曲で有名なペテロの改悛だと。字幕には2人は後悔しなかったと出たが誤訳に違いない。

【後記】今回は息抜きとして筆者が最近受けた2つのショックについてのご報告。ロホリツの逸話について最近新井さんに指摘されるまでその信憑性を全く疑っていなかったこと。敬愛する吉田秀和に思い違いがあつてそれを今迄誰も咎めなかったことを見つけたこと。書かれたものをどこまで真実と見なすかは難しいところですね。(山田)